

# 「実行機能」の視点を用いた 効果的なアセスメント及び支援に関する研究

---

障害者支援部門 宮澤 史穂、渋谷 友紀、三浦 卓

# 背景と目的

---

## ● 実行機能とは

- ・ ある目標を達成するために思考と行動を調整する  
認知機能
- ・ 実行機能に困難があると、職場では、仕事の手はずや  
段取りが悪い、時間内・期限内に仕事を終わられない  
といった課題が生じる

## ● 目的

実行機能に困難のある対象者への効果的なアセスメント  
方法及び効果的な支援（介入）のポイントについて明らかに  
する

# 背景 | 本研究で用いる実行機能の定義

BRIEF-A (Roth, Isquith, & Gioia, 2005)の下位尺度に従う

| 下位項目名             | 定義                                                                                                                                       |
|-------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 抑制                | 衝動をコントロールし、言語的、注意的、身体的な行動を適切なタイミングで止めることができる。                                                                                            |
| シフト               | 状況に応じて、ある状況、活動、又は問題の側面を自由に移動し、問題解決をサポートするために柔軟に考えることができる。                                                                                |
| 情緒のコントロール<br>(情緒) | 感情的な反応を適切に調節することができる。                                                                                                                    |
| セルフモニタ<br>(セルフ)   | 自分の行動が他人に与える影響を認識することができる。                                                                                                               |
| 開始                | 外部から促されることなく、課題や活動を始めることができる。                                                                                                            |
| ワーキングメモリ<br>(WM)  | タスクを完了するために、情報を心に留めておくことができる。                                                                                                            |
| 計画・組織化<br>(計画)    | 将来の出来事を予測することができる。<br>目標を設定することができる。<br>タスクを実行するための手順を事前に作成することができる。<br>段階を踏んでタスクを進めることができる。<br>目的を達成するために情報や行動を組織化し、体系的にタスクを実行することができる。 |
| タスクモニタ<br>(タスク)   | タスクの実行中又は終了後に、ミスがないかパフォーマンスを評価することができる。                                                                                                  |
| 道具の整理 (道具)        | 仕事場や生活空間を整頓し、タスクに必要な資材を管理することができる。                                                                                                       |

# 本調査研究の構成

---

研究１：実行機能の概念に基づく支援プログラムの  
実施記録の分析

研究２：地域障害者職業センター等調査

研究３：実行機能に困難のある対象者への支援に  
関するフォーカスグループ・インタビュー

# 研究Ⅰ：実行機能の概念に基づく支援プログラムの の実施記録の分析

# 目的と方法

## ● 目的

実行機能の概念に基づく支援プログラム「作業管理支援」における支援者のアセスメントや支援の実際について検討

## ● 方法

- ・ 分析対象：職業センター、地域センターから提供を受けた9ケース
- ・ 効果量の分析：支援プログラム中で観察された実行機能関連の行動を数量化の上「生起率」を求め、介入前後の変化を分析



中程度の正の効果が考えられたのは、5ケース（55.6%）、効果が確認できなかったのは4ケース（44.4%）

- ・ 下位項目の分析：生起率を下位項目ごとにも検討

生起率：実行機能に関連する行動のリストの評価（どの程度できたか）を得点化し、その合計を評価数で割ったもの

# 作業管理支援の流れ

## フェイズ1

「作業管理課題」への基礎的な対応力の習得

- ・ MWS、メモリーノート等の訓練



## フェイズ2

アセスメントと対処方法の検討・提案

- ・ 第1回作業管理課題の実施

※本調査研究では「ベースライン期」と呼ぶ



- ・ 個別相談（課題点の共有と対処方法の検討）



## フェイズ3

フェイズ2で整理した対処方法の実践的活用

- ・ 第2回作業管理課題の実施

※本調査研究では「介入期」と呼ぶ



- ・ 個別相談（課題点の共有と対処方法の検討）

\*各フェイズの作業管理課題は5日間連続で実施

## 下位項目の分析結果

下位項目の生起率を、平均値とその95%信頼区間を用いて大・中・小に分け、ベースライン期と介入期でどのように変化したかを示す

|       | 抑制               | シフト              | 情緒               | 開始               | WM               | 計画               | 道具  | タスク              | セルフ              |
|-------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|-----|------------------|------------------|
| ケース01 | ▲ <sub>中→大</sub> | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大              | ▲ <sub>中→大</sub> | 大→大 | ▼ <sub>中→小</sub> | 大→大              |
| ケース02 | ▲ <sub>小→大</sub> | 大→大              | 大→大              | ▲ <sub>小→大</sub> | ▲ <sub>小→大</sub> | ▲ <sub>小→大</sub> | 大→大 | ▲ <sub>小→中</sub> | ▼ <sub>大→中</sub> |
| ケース03 | 小→小              | 小→小              | 小→小              | 小→小              | 小→小              | 小→小              | 小→小 | 小→小              | 小→小              |
| ケース04 | ▼ <sub>大→中</sub> | ▲ <sub>小→中</sub> | 小→小              | 大→大              | ▲ <sub>小→中</sub> | 小→小              | 中→中 | 小→小              | ▲ <sub>中→大</sub> |
| ケース05 | ▲ <sub>中→大</sub> | 大→大              | ▲ <sub>小→中</sub> | ▲ <sub>中→大</sub> | 大→大              | 中→中              | 大→大 | 大→大              | 大→大              |
| ケース06 | 大→大              | 大→大              | ▼ <sub>大→小</sub> | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大 | 大→大              | 大→大              |
| ケース07 | 大→大              | 大→大              | ▼ <sub>中→小</sub> | 大→大              | 大→大              | 小→小              | 大→大 | ▼ <sub>大→小</sub> | 小→小              |
| ケース08 | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大              | 大→大 | ▼ <sub>大→中</sub> | ▲ <sub>小→大</sub> |
| ケース09 | 大→大              | 大→大              | ▲ <sub>小→大</sub> | 大→大              | 大→大              | ▲ <sub>小→中</sub> | 大→大 | ▲ <sub>小→大</sub> | ▲ <sub>小→大</sub> |

## 下位項目の分析結果

下位項目の生起率を、平均値とその95%信頼区間を用いて大・中・小に分け、ベースライン期と介入期でどのように変化したかを示す

|       | 抑制   | シフト  | 情緒   | 開始   | WM   | 計画   | 道具  | タスク  | セルフ  |
|-------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|
| ケース01 | ▲中→大 | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | ▲中→大 | 大⇒大 | ▼中→小 | 大⇒大  |
| ケース02 | ▲小→大 | 大⇒大  | 大⇒大  | ▲小→大 | ▲小→大 | ▲小→大 | 大⇒大 | ▲小→中 | ▼大→中 |
| ケース03 | 小⇒小  | 小⇒小  | 小⇒小  | 小⇒小  | 小⇒小  | 小⇒小  | 小⇒小 | 小⇒小  | 小⇒小  |
| ケース04 | ▼大→中 | ▲小→中 | 小⇒小  | 大⇒大  | ▲小→中 | 小⇒小  | 中⇒中 | 小⇒小  | ▲中→大 |
| ケース05 | ▲中→大 | 大⇒大  | ▲小→中 | ▲中→大 | 大⇒大  | 中⇒中  | 大⇒大 | 大⇒大  | 大⇒大  |
| ケース06 | 大⇒大  | 大⇒大  | ▼大→小 | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大 | 大⇒大  | 大⇒大  |
| ケース07 | 大⇒大  | 大⇒大  | ▼中→小 | 大⇒大  | 大⇒大  | 小⇒小  | 大⇒大 | ▼大→小 | 小⇒小  |
| ケース08 | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大  | 大⇒大 | ▼大→中 | ▲小→大 |
| ケース09 | 大⇒大  | 大⇒大  | ▲小→大 | 大⇒大  | 大⇒大  | ▲小→中 | 大⇒大 | ▲小→大 | ▲小→大 |

・全体的に、「情緒のコントロール」、「計画・組織化」、「タスクモニタ」、「セルフモニタ」でポジティブな結果（「大⇒大」 or ポジティブに変化）が相対的に出にくい

・これらの下位項目に対する対処方法・補完方法の更なる検討が必要

## まとめ

---

- ケースによってポジティブ/ネガティブな結果を示す項目が異なり、対象者に特有の傾向がみられている可能性がある
- 介入期の生起率がベースライン期よりも低くなる場合もあり、そのような場合の理解の仕方や対処の方法も検討する必要がある

## 研究2:地域障害者職業センター等調査

## 目的と方法

---

### ● 目的

実行機能に困難のある対象者への支援実施状況や、  
実行機能に関する困難を観察しやすい場面（複合的作業  
場面）を用いた支援の実態把握

### ● 方法

- ・ 調査対象：地域センター、広域センター、職業センター
- ・ 調査方法と期間

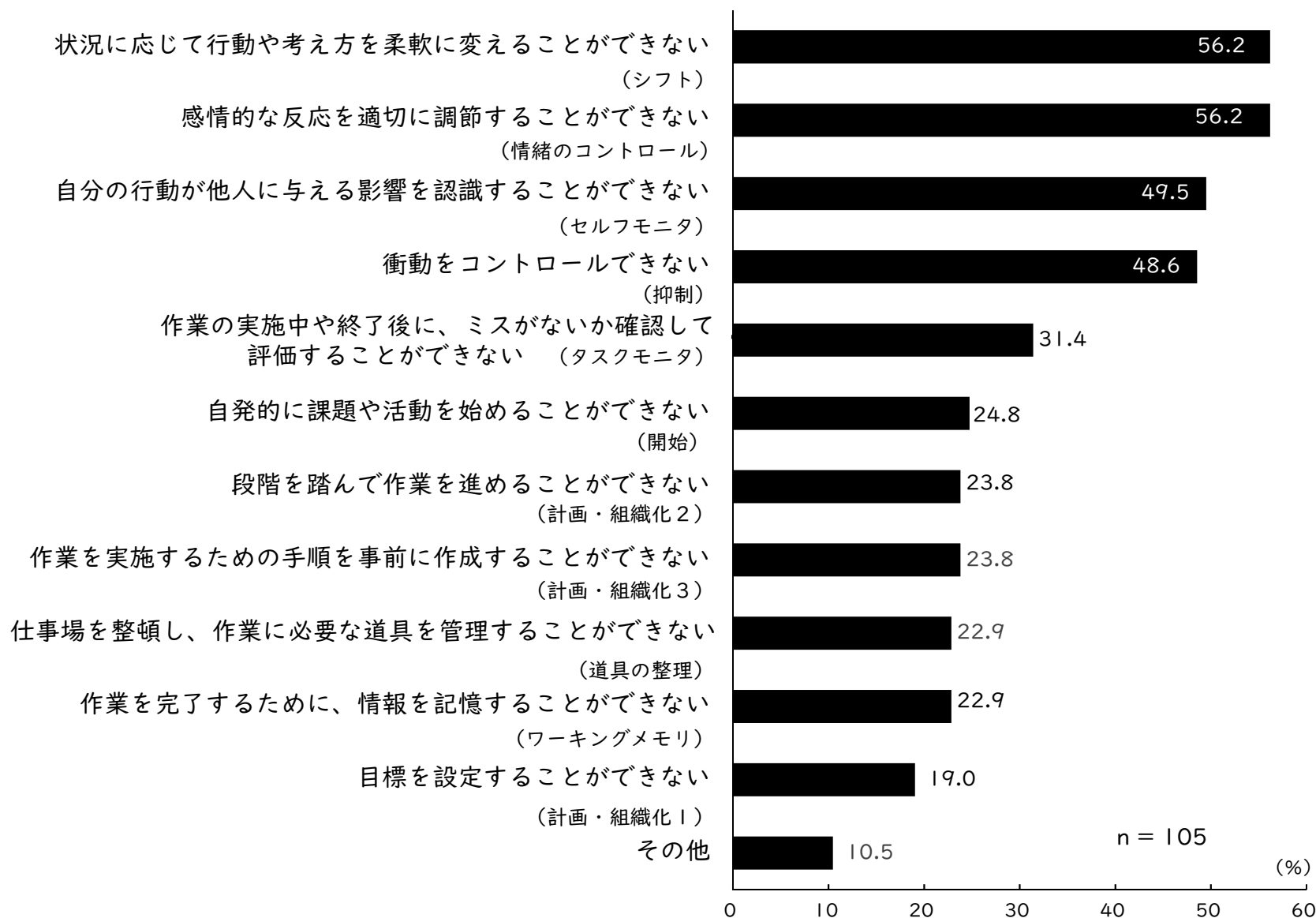
質問紙調査とし、2023年7月～8月に実施

- ・ 質問項目
  - ・ 実行機能に関連した困難が生じている対象者への支援  
実施状況
  - ・ 複合的作業場面を用いた支援の実施状況

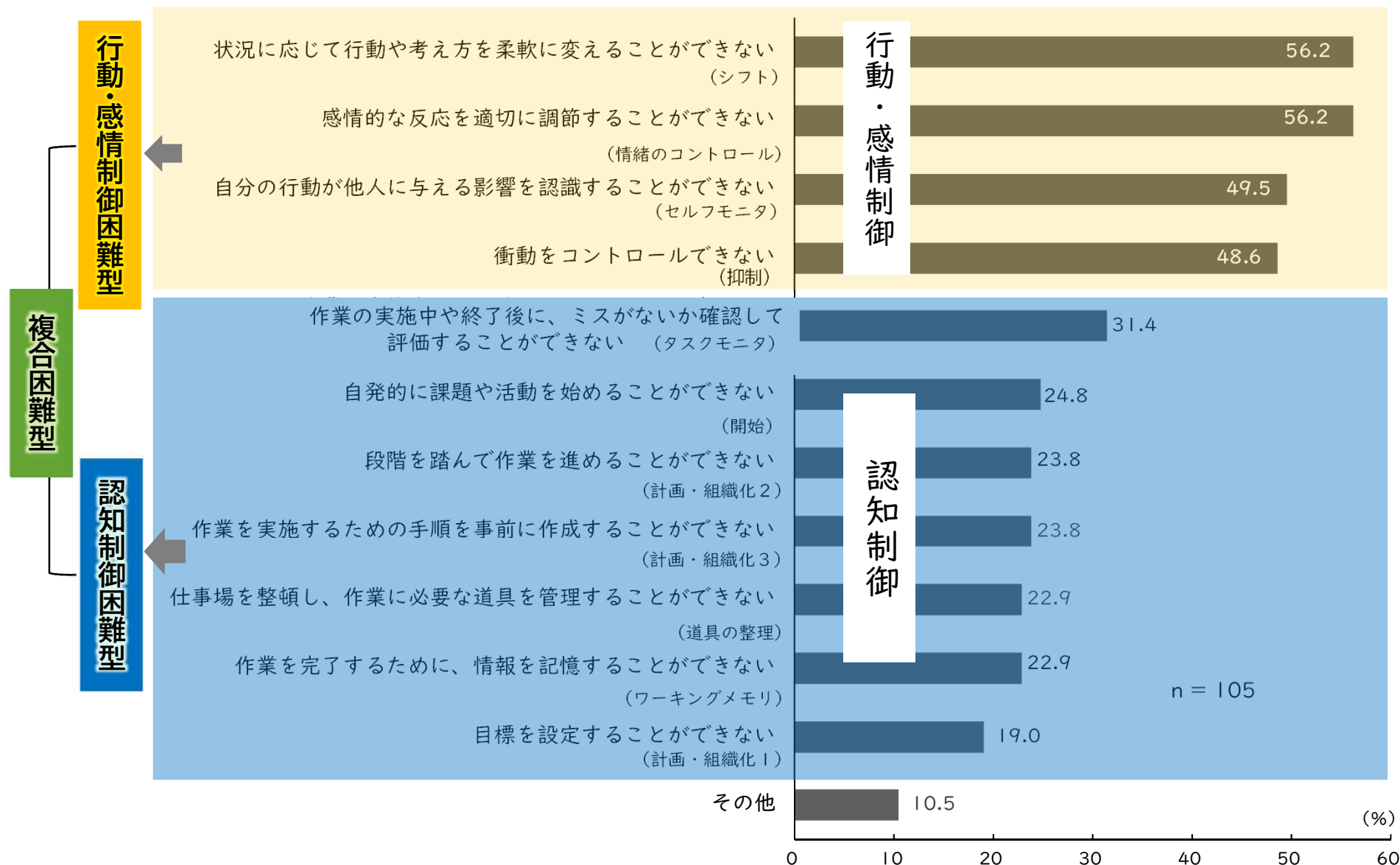
## 結果 | 事例の記述例

|             |                                                                                                                                             |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 対象者に生じていた困難 | <ul style="list-style-type: none"><li>・目の前のことのみに集中するため周囲の状況を把握することが困難</li><li>・差し込み作業が生じた際に元の作業に戻ることができない</li></ul>                         |
| 支援内容        | <ul style="list-style-type: none"><li>・単独作業スペースを確保し、余分な情報を遮断した</li><li>・支援スタッフと相談しながら作業遂行計画をたてるようにした</li></ul>                              |
| 支援の経緯や理由    | 自らの処理方法に固執してミスが発生する様子があり、支援スタッフとの相談を通じて作業遂行を行うことでミス軽減が図られることが確認されたため                                                                        |
| 支援結果        | <ul style="list-style-type: none"><li>・周囲から「〇〇さんの作業スペースは確保することが望ましい」と理解を得やすくなった</li><li>・ミスが減少できたことで「支援者と相談するメリット」を対象者が実感することができた</li></ul> |

# 結果 | 対象者に生じていた困難

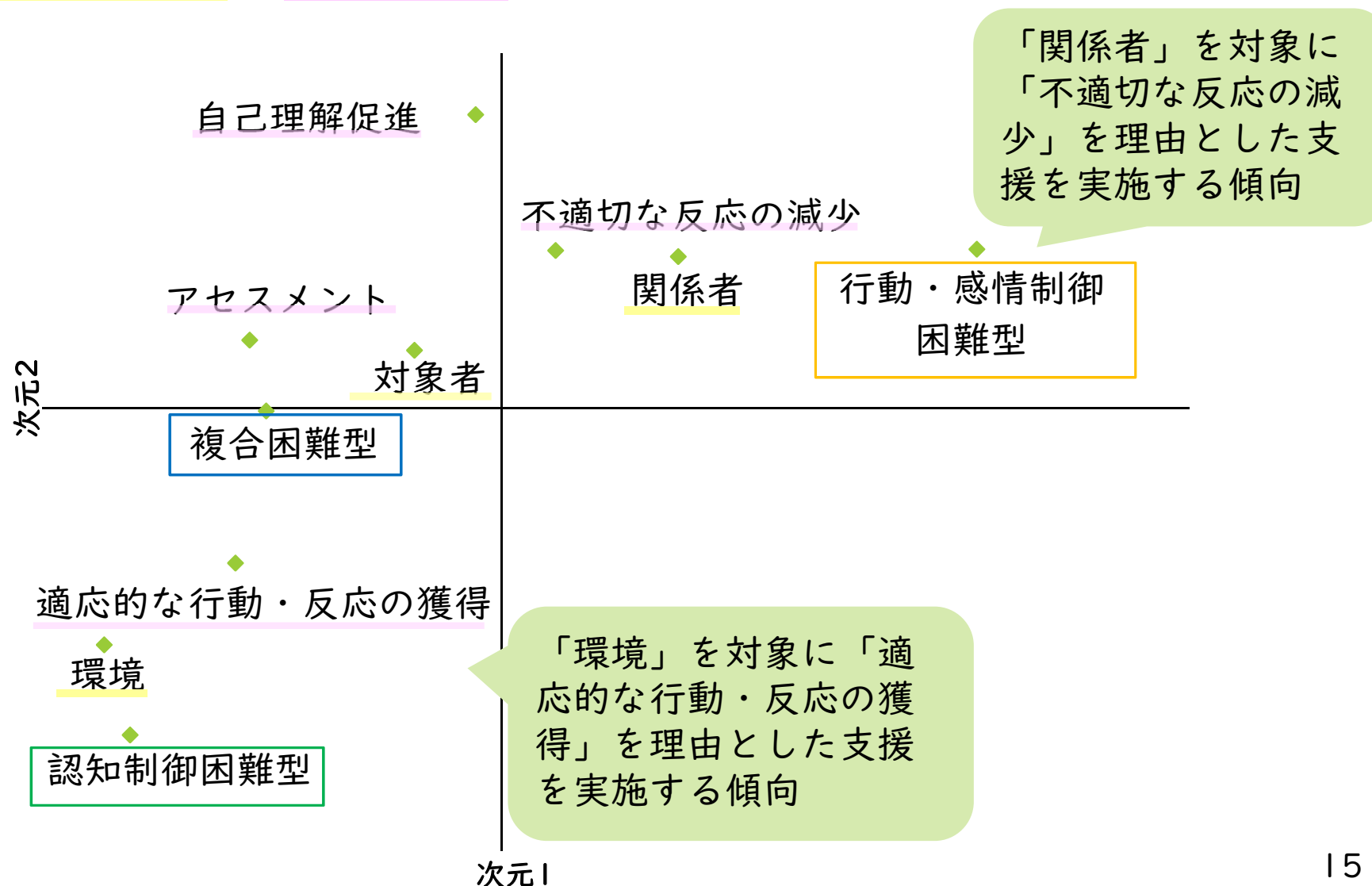


# 結果 | 事例の類型化



# 結果 | 困難類型別支援の実施状況

支援の対象や実施理由に違いがある可能性



## 結果 | 困難類型別課題の改善状況

課題の改善状況に違いがある可能性

\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$

|                        | 改善 | 一部改善  | 改善なし | 不明 |
|------------------------|----|-------|------|----|
| 行動・感情制御困難型<br>(n = 39) | 13 | 8     | 10 * | 8  |
| 認知制御困難型<br>(n = 20)    | 4  | 12 ** | 2    | 2  |
| 複合困難型 (n = 46)         | 18 | 12    | 4    | 12 |

「不明」を除いて  $\chi^2$  検定を実施： ( $\chi^2(4) = 12.05, p < .05, V = 0.27$ )

## 研究3: 実行機能に困難のある対象者への 支援に関するフォーカスグループ・インタビュー

## 目的と方法

---

### 目的

実行機能に困難のある対象者について、その支援方法や支援を実施する際の課題、効果のポイントを明らかにする

### 方法

- 実施時期：2024年 6 月
- 実施時間：120分
- 対象者：障害者職業カウンセラー 6名  
(支援経験年数10～17年)

## 方法 | インタビュー内容

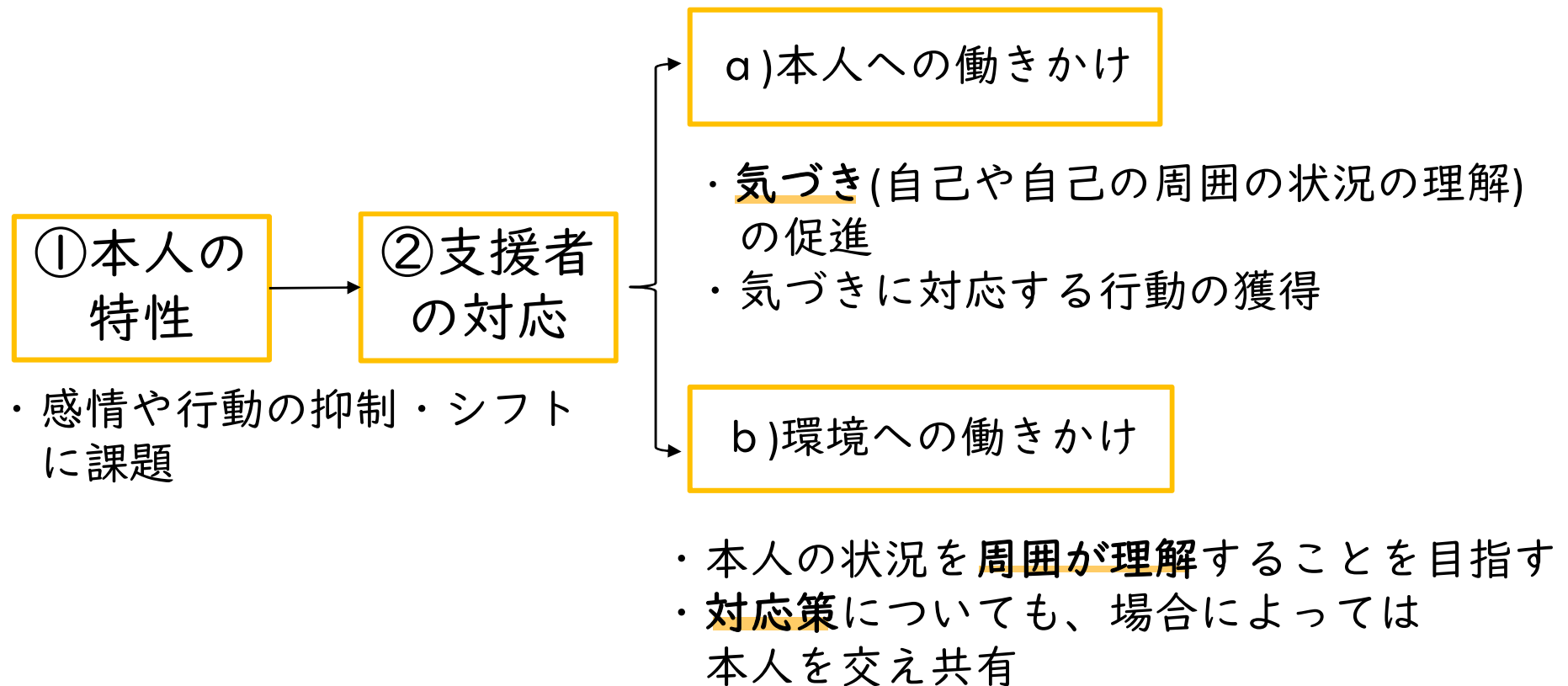
- ・ 研究 2 で示した 3 つの困難類型に対応したエピソード例を提示し、それぞれについて以下の内容のインタビューを実施
- ・ エピソード例は、アンケート調査の結果から作成

エピソード例として提示したケースについて、過去に対応した同様または類似していると思うケースのうち、就職や復職、職場定着がうまくいったケース、部分的でも困難が生じていた状況が改善したケースがあればどのような関り、働きかけを行ったか、できるだけ具体的な内容とその際着目したポイントや留意点についてお話してください

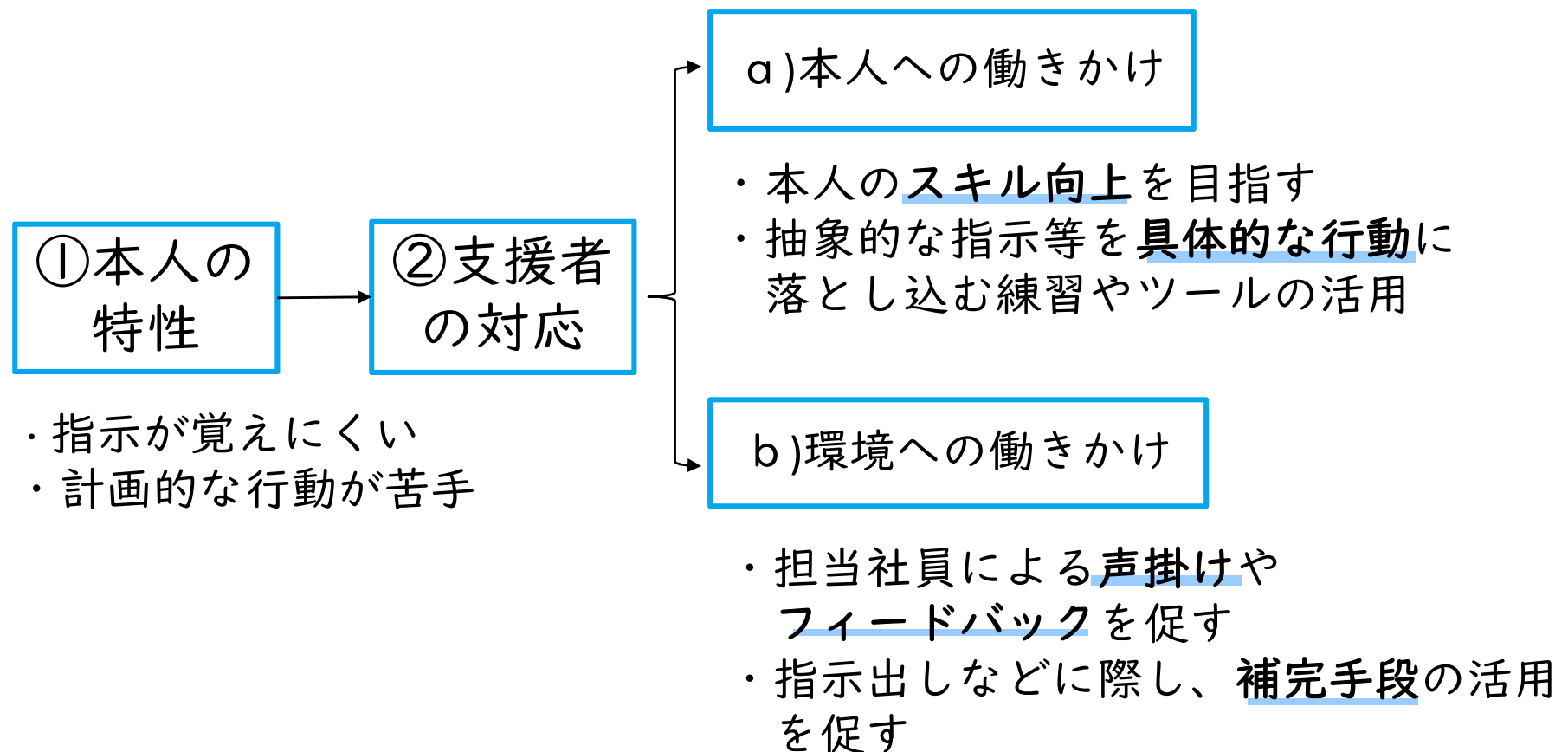
# 方法 | 参加者に提示したエピソード例

| エピソード<br>番号 | エピソード内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| エピソード<br>例1 | <p>【初回面談時に、以下のようなエピソードが本人及び周囲の人（家族、職場の方、支援機関等）から聞かれた】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 業務とは関係なく緊急でない用件だが、勤務中にスマートフォンをしばしば操作する。</li> <li>・ 効率化のため作業の手順が簡素化されたが、以前の手順が抜けず、しばらく続けていた。</li> <li>・ 本人がミスの指摘を受けた際に、自分なりの理由を伝えると（上司等から）「言い訳ばかりするな」と言われたことがある。</li> <li>・ カチンと来ることがあると、相手に関わらず、思ったままを伝えてもめることがある。</li> </ul>                 |
| エピソード<br>例2 | <p>【初回面談時に、以下のようなエピソードが本人及び周囲の人（家族、職場の方、支援機関等）から聞かれた】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 朝礼で話される内容をその場では覚えられないことが多い。</li> <li>・ 気分が乗らないときになかなか課題に手を付けられない。</li> <li>・ 目標設定や優先順位付けなどが難しい。</li> <li>・ 自分でスケジュールを立てると、当初想定した作業時間をオーバーする。</li> <li>・ 作業を進めるにあたっての段取りを考えることが苦手である。</li> <li>・ 作業の途中や終了後に、自分の作業状況、作業結果を振り返ることがない。</li> </ul> |
| エピソード<br>例3 | <p>【初回面談時に、エピソード例1及び2のいずれのエピソードも本人及び周囲の人（家族、職場の方、支援機関等）から聞かれた】</p>                                                                                                                                                                                                                                                                               |

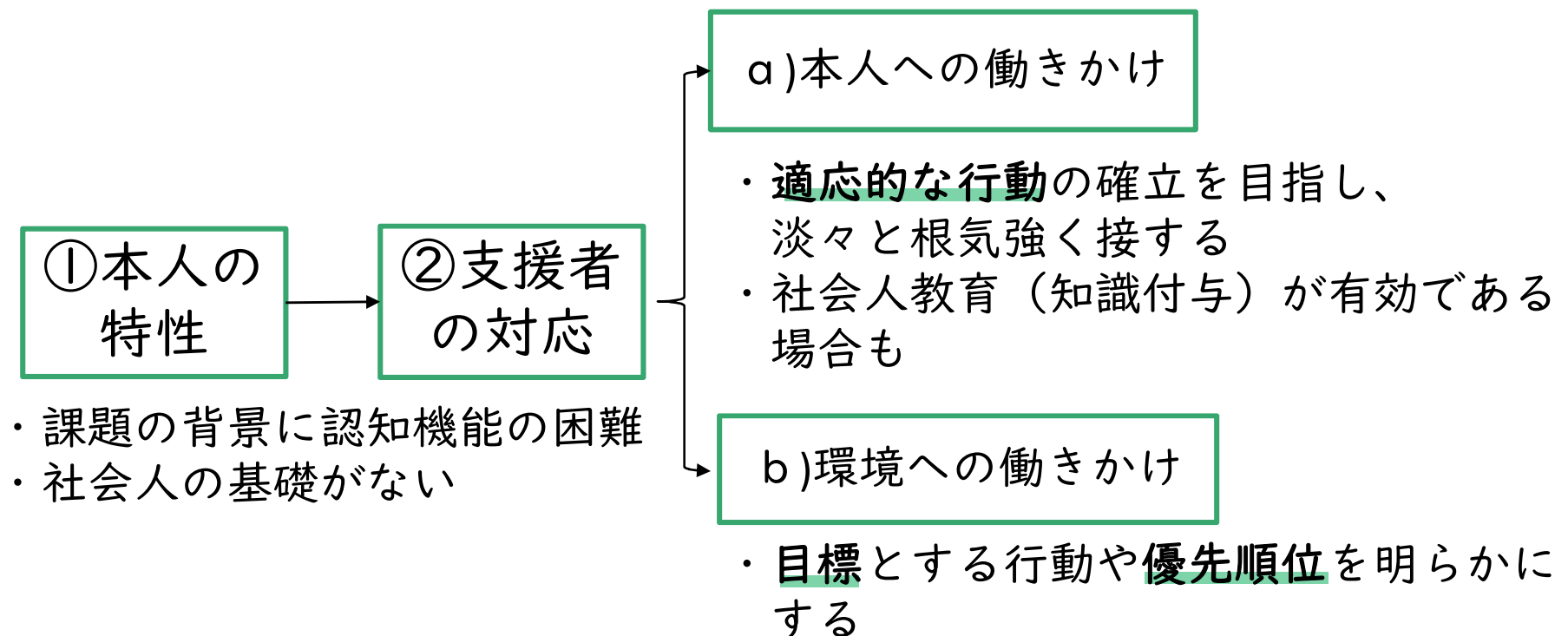
## 結果 | エピソード例Ⅰ（行動・感情制御困難型）



## 結果 | エピソード例 2（認知制御困難型）



## 結果 | エピソード例 3（複合困難型）



# まとめ

客観視できているか → 気づきを与える

- ・ エピソード例 1 ～ 3 は支援の当面の目標設定が異なる
- ・ 目指すところは、いずれも本人及び周囲の困り感の解消

## ○共通点

- ・ 対象者本人が事態をどれだけ客観視できているかが重要

## ○相違点

- ・ 「困る」と「気づく」ことの傾向

エピソード例 1 : 本人が気づくより先に「周りが困る」ことが多い

エピソード例 2 : 既に本人に一定程度の気づきがある

エピソード例 3 : 1 と 2 の複合（教育的な対応が必要）

# 全体のまとめ

---

## ●本調査研究の意義

1. 生態学的妥当性が高い支援プログラムの支援記録の分析
2. 実行機能に困難のある対象者を、3つの困難類型に分類  
→類型ごとにアセスメントや介入のポイントを具体的に示した

## ●今後の課題

実行機能の概念に基づいたアセスメント結果を踏まえた支援方法について、より詳しく検討